加齢による変化を考慮した意思決定プロセス尺度作成の試み

奥田　倍子

加齢にともなって意思決定は変化するのだろうか。意思決定とは，いくつかの可能な行動の選択肢から一つを選ぶことである（繁桝，1999）。内閣府（2022）の発表によると，令和 3 年 10 月 1 日時点で日本の 65 歳以上の人口が総人口に占める割合（高齢化率）は 28.9%に達し，今後も上昇を続けることが見込まれている。高齢期においては，医学的・金銭的な問題に関する意思決定の頻度や重要度が増す傾向にある。高齢化が進むわが国において，高齢者の意思決定支援は重要課題である。

先行研究によると，高齢者は若年者に比べて，意思決定を他者に任せる，判断に用いる情報量が少ない，ヒューリスティックスを用いる，過去の意思決定に満足するなど，意思決定に関する高齢期のさまざまな傾向が示されている。しかし，これらは意思決定における特定の側面に関する研究であり，意思決定のプロセスを考慮した研究はされていない。

Löckenhoff（2018）は，意思決定における年齢差を調査するための枠組みを提唱している。さらに，Löckenhoff（2018）は，意思決定プロセスを用いたアプローチは，意思決定プロセスの各ステップの年齢差に着目でき，加齢と意思決定の幅広い傾向を捉えるために有用な研究方法であると述べている。意思決定プロセスには「問題認識（Decision Identification & Engagement）」，「情報探索（Information Search）」，「方略選択（Strategy Selection & Evaluation）」，「実行（Implementation）」，「評価（Post-Decision Evaluation）」，「委任・回避（Decision Delegation or Avoidance）のステップがあるとしている。

意思決定に関する心理尺度について先行研究を概観すると，これまでに，さまざまな尺度が開発されているが，意思決定の一側面に関する尺度が多く，意思決定プロセスは考慮されていない。また，高齢期の意思決定の傾向や加齢変化には焦点をおいていない。

そこで，本研究では，加齢が意思決定プロセスに与える影響について検討するために，加齢による変化を考慮した意思決定プロセス尺度の作成を試みることを目的とした。研究 1 において予備調査 2 回および本調査 1 回，研究 2 において再調査 1 回の合計 4 回の調査を実施し，意思決定プロセス尺度の因子構造，信頼性，妥当性，年齢による影響の検討を行った。

研究1において，先行研究に基づき，高齢者の意思決定における特徴を考慮して試作版尺度を作成し，予備調査を 2 回実施し，項目の選定を行った。その結果，「委任・回避」「情報探索」「方略選択」「実行」「評価」の 5 カテゴリ―17 概念で構成される 94 項目の尺度を作成した。

続いて，本調査を，オンライン調査会社へオンライン調査を委託して実施した。分析対象者は 20 歳～88 歳の男女 469 名（平均年齢：53.79±16.04 歳）であった。意思決定プロセス尺度の因子構造，信頼性，妥当性を検討した結果，11 因子が抽出された。抽出された因子は，【委任・回避】【選択肢】【情報量】【基準・経験】【時間】【直感】【リスク】【実行委託】【先延ばし・不実行】【後悔】【満足】であった。11 因子において許容される内的一貫性が確認された。一方，妥当性に関して，【委任・回避】【選択肢】【情報量】【時間】【実行委託】【先延ばし・不実行】【後悔】は一定の構成概念妥当性を有していると考えられたが，【基準・経験】【直感】【リスク】【満足】についてさらなる検討が必要であった。

次に，研究 2 において，研究1の分析対象者を対象として，オンライン調査会社へオンライン調査を委託して再調査を実施した。分析対象者は 20 歳～86 歳の男女 317 名（平均年齢：52.13±16.08 歳）であった。意思決定プロセス尺度の信頼性，妥当性を検討した結果，許容される内的一貫性および再検査信頼

性が確認された。妥当性については，【直感】【満足】は一定の構成概念妥当性を有していると考えられたが，【基準・経験】【リスク】はさらなる検討が必要であった。

研究１および研究２で，意思決定プロセスにおける年齢による影響を検討したところ，【情報量】【後悔】【満足】に関して，高齢層は若中年層に比べて，意思決定の際に収集・考慮する情報量が少なく，意思決定の結果をポジティブに評価し，後悔が少ない傾向が認められた。これらは先行研究による高齢期の傾向と一致した。これに対して，【委任・回避】【時間】【実行委託】【先延ばし・不実行】に関して，高齢層は若中年層に比べて，意思決定や実行を他者に委任する，意思決定に時間がかかる，意思決定や実行を先延ばしにする，決めたことを実行しないなどの傾向は低く，先行研究による高齢期の傾向と一致しなかった。【選択肢】【基準・経験】【直感】【リスク】では年齢層による差は認められなかった。

結論として，本研究において，11 因子 48 項目からなる意思決定プロセス尺度を作成した。許容される内的一貫性および再検査信頼性を有していることが確認された。一方で，妥当性はさらなる検討が必要であった。加えて，年齢による影響について，実験的場面を想定した研究などにより検討を深めていく必要性が示された。（臨床死生学・老年行動学）